

【巻頭随想】

日本ブドウ・ワイン学会2020名古屋大会に寄せて

中尾 義則

名城大学農学部

On the Occasion of ASEV JAPAN 2020 Annual Meeting in NAGOYA

Yoshinori NAKAO

Faculty of Agriculture, Meijo University

日本ブドウ・ワイン学会2020名古屋大会が名城大学（愛知県名古屋市）での開催になりました。東海地域で初めての開催であり、皆様方を愛知県にお迎えできることを嬉しく思っています。2020年は新型コロナウイルス感染症への対策で始まった気がします。その感染拡大によって人々が集まる場所が避けられ、多くのイベントが中止となり、消費行動を抑制し、世界経済が低迷する悪循環が広がっています。本年は日本で開催されるオリンピックの観戦に多くの外国人が日本を訪れるため、日本ワインを知ってもらふ拡大の機会と感じていましたが、その開催さえ危ぶまれています（3月執筆時点）。

さて、愛知県は機械工業が盛んな印象がありますが、農業県でもあり農業総産出額は国内8位です。また、醤油や味噌といった発酵食品の生産量も全国屈指です。愛知県は暖地が多くブドウ栽培に最適な場所は限られています。生食用ブドウを中心に国内9位の生産量があります。ところが、ワインの生産量は少なく、愛知県だけではなく東海地方（4県）を合わせても661 kLです。また、愛知県のワインの消費量は国内7位ですが、一人あたりの消費量は10位以下となっています（すべて2018年）。このように、これからの可能性を秘めた地域です。

1980年代から大きく取り上げられるようになった温暖化を初めとする異常気象は愛知県だけではなく

世界的にブドウ栽培に大きな影響を及ぼし続けています。ワインの世界ではテロワールという言葉で地形、土壌特性、気候などから形成される栽培環境を表現します。農業、特に果樹栽培は適地適作を基本として営まれ、新たなブドウ園を立ち上げる場合にはその地域の気候や適正品種を見極めながら始めることとなります。一方、古くから続くブドウ産地の個々の栽培者はこれまで培ってきた農地で数々の栽培努力によりブドウを栽培環境の変化に対応させながら栽培管理しています。しかし、近年の気象変動の早さに対応しきれない場面も生じてきており、品質の維持や向上に今まで以上の苦労と時間を割くことがあります。その問題解決のための新たな技術開発が求められています。産官学の研究機関や栽培者は、気象変動に伴う果実の着色不良や果粒品質の変動などの対策も視野に入れながら研究を続けています。日本ブドウ・ワイン学会はブドウ学、醸造学および経済学などが一体となった幅広い領域をつなぐ学会です。日本のブドウ栽培とワイン産業に果たす役割は大きく、本大会が愛知県で開催されることは東海地方のブドウとワインに関する研究と生産技術の発展、そして消費の活性化につながればと思います。皆様の参加が有意義になるようにお力添えできればと思っています。